

Title	第二回座談会 一九九〇年六月二十三日(土)
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.65(239)- 67(241)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第一回座談会

一九九〇年六月一十三日（土）

三木 それでは、三田史学の百年を語る座談会の第二回目を行いたいと思います。予定は六時までです。

先週の土曜日、第一回をやりまして、そこで福沢諭吉

から慶應義塾大学の史学科を開設した田中萃一郎まで、それから幸田成友ほかの主として日本史の方々、それから野村兼太郎、高村象平などの、これは経済学部ですが、日本経済史、西洋経済史をやられた方々、それから古部百太郎、間崎万里といった西洋史の方々について、大変おもしろい座談会が第一回に行われました。

そこでかなりはつきりしたことは、一つは、田中萃一

郎が百年前に慶應義塾大学の史学科を開設したときの考え方で、日本史、東洋史、西洋史と分けない。似たりよつたりのころに、東京帝国大学のほうでは国史、東洋史、西洋史と三つに初めから分科していくわけですが、

塾の場合には田中萃一郎、またそれをバックした方々が、日・東・西とを分けない、単一の史学科としていくという方針が確かめられました。

いま一つは、開設に当たって、山路愛山のような在野の史論史学の方などをも講師として招いたりしている。その背景としては、明らかに、それまで日本の大学で史学科を開設したのは東京帝国大学だけなのですが、そういう官学に対して在野の史学科をつくるという考え方があはつきりとあつたのではないかということがあらわれています。

いま一つは、第一回のお話の中で出てきたのですが、塾的とでも申しますか、現在のように大学だとか学問がやたらに制度化されていない、もっと自由に、外ともつながり、たとえば他のインスティテューションに在籍の

方が、そこでは余りやられないで、慶應義塾大学に四コマも授業を持つておられるとか、そういうた人事に関しても非常にとらわれない、のびのびした、まさに塾の名にふさわしいような雰囲気の中で行われてきた。そのことと関連するのですが、これは当然のことですが、先ほど名前を挙げましたような先生方は、近代日本史学史の中で第一級のお仕事をなさつた方々なのです。外ともいろいろな関連を持つておられる。近代日本史学史の中に非常に重要な位置を占めて三田史学というものは形づくられてきた。そういうことが第一回の座談会ではつきりした点です。

第一回は主として三田史学草創の史学科開設に到るまでと、それから後は日本史、西洋史の方向へ進まれた方々が主で、きょうは考古学、民族学、フォークロア、東洋史、イスラム研究を主なテーマとしてやりたいと思います。

ただ、さつきも申しましたように、そもそも田中萃一郎が、日・東・西とを分けないという、ある意味では大変現代的な考え方でやっているので、一応、東洋史、西洋史、考古学などと申しましても、実は皆さんそれからはみ出して、お互にいろいろ関わっている。たっぷり

時間を取つてやりたいので、一応二回に分けたのですが、そういった雰囲気で三田史学というものは形づくられたということを、まず心にとめていただきたいと思います。

本日第二回は、前に出しましたものと順序を変えさせていただきます。最初に柳田国男、松本信広ほかを民族学、フォークロア、東洋史の三つの学問が重層するなかで伊藤先生にお話しいただく予定だったのですが、いろいろ後のことを考えまして、むしろ最初に大山柏、藤田亮策ほかを中心に考古学について江坂先生にお話しいただき、次に伊藤先生、あと、前嶋先生を中心としたイスラム研究の流れに関して坂本さんが報告し、私がコメントいたします。まず語り手が四人全部語つて、中休みをしまして、その後は、ご出席いただいている方全部を含めて、まさに座談会で、質問なりご意見なり、全く自由にお出しitただく、そういう仕方で進めたいと思います。

初めの二つのテーマに関しては、近森先生に進行係を務めていただいて、前嶋先生のときには私が進行係をします。近森さん、最後の自由討論のときにはお願いします。

それでは、近森先生にバトンを渡しますので、よろし

くお願ひいたします。

近森 昨年、私ども民族学・考古学研究室では、江坂先生が塾をおひきになるのを記念しまして、さらに、ちょうど昨年度、私達の考古学・民族学の専攻課程が新設されて満十年を迎えたのを機会に、三田で学んだ現役の若い連中三十四名が論文を寄せまして、六百数十ページの論文集『考古学の世界』（新人物往来社刊）という本を出版いたしました。それを見ますと、旧石器時代から江戸時代、それから日本から韓国、中国、オセアニア、さらに中東、アメリカ大陸に及ぶ、実に多様な考古学、民族学の研究者が、現にわれわれの周りでみんな活躍をしているわけです。非常に多彩なものになつたと思います。それからまた、研究室の研究紀要としまして、オケージョナル・ペーパーというのを出しておりますけれども、これも今年で第八号を出すことになりました。

私どもの専攻は十年がたつばかりなのですけれども、三田の山の考古学・民族学の研究活動というのは、三田史学会が創立する以前に遡ります。すでに大正十四年には、移川子之蔵先生の人類学と呼ばれる講義が三田の山で開かれました。そして野外調査としては、橋本増吉、移川先生の神奈川県の子安貝塚の発掘が始められた。そ

ういうことを見ていきますと、塾の民族学・考古学研究は実際に七十年を超える歴史があるわけです。もつとも、福沢諭吉が日本で最初に民族学に関心を持つて、みずからフランス民族学会の会員になつたということを考えれば、百年をはるかにこえる歴史になるわけです。

この間、多くの先輩たちが私達の研究、教育の基礎を築いてきてくださつたわけです。きょうお迎えした名譽教授の江坂先生には、まず三田の考古学研究を振り返っていただきます。次いで伊藤先生には、フォークロア、あるいは民族学の研究活動を中心に、東洋史に関わる話をやはりこの七十年なり百年なりという活動の経過を語つていただきたいと思います。

それでは初めに江坂先生にお願いしたいと思います。